

# 李陵

中島敦

青空文庫



漢かんの武帝ぶていの天漢てんかん二年秋九月、騎都尉きとゐ・李陵りりやうは歩卒五千を率  
 い、辺塞へんさい遮虜しやりよしやうを發して北へ向かつた。阿爾泰山脈アルタイの東南  
 端ゴビさばくが戈壁沙漠ゴビさばくに没せんとする辺の磽こうかくたる丘陵地帯を縫つて北  
 行すること三十日。朔風さくふうは戎衣じゆういを吹いて寒く、いかにも万里  
 孤軍來たるの感が深い。漠北ぼくほく・浚稽山しゆんけいざんの麓ふもとに至つて軍はよ  
 うやく止營した。すでに敵匈奴ききやうどの勢力圏に深く進み入つてい  
 のである。秋とはいつても北地のこととて、苜蓿うまごやしも枯れ、榆にれ  
 や檉かわやなぎ柳なぎの葉ももはや落ちつくしている。木の葉どころか、木

そのものさえ（宿營地の近傍きんぼうを除いては）、容易に見つからないほどの、ただ砂と岩と積かと、水のない河床との荒涼たる風景であつた。極目人煙を見ず、まれに訪れるものとしては曠野こうやに水を求める羚羊かもしか羊ぐらいのものである。突兀とつこつと秋空を劃くぎる遠山の上を高く雁かりの列が南へ急ぐのを見ても、しかし、將卒一同誰一人として甘い懷郷の情などに唆そそられるものはない。それほどに、彼らの位置は危険極きわまるものだったのである。

騎兵を主力とする匈奴に向かつて、一隊の騎馬兵をも連れずに歩兵ばかり（馬に跨またがる者は、陵とその幕ばくりよう僚数人にすぎなかつた、）で奥地深く侵入することからして、無謀の極きわみというほかはない。その歩兵も僅わずか五千、絶えて後援はなく、しかもこの

浚稽山しゅんけいざんは、最も近い漢塞かんさいの居延きよえんからでも優えんに一千五百里

(支那里程)は離れている。統率者李陵への絶対的な信頼と心服とがなかったならとうてい続けられるような行軍ではなかった。

毎年秋風が立ちはじめると決きまって漢の北辺には、胡馬こばに鞭むちうつ

た剽悍ひょうかんな侵略者の大部隊が現われる。辺吏が殺され、人民が

掠かすめられ、家畜が奪略される。五原ごげん・朔方さくほう・雲中うんちゆう・上じようこ

谷く・雁門がんもんなどが、その例年の被害地である。大將軍衛青えいせい・

嫖騎將軍霍去病ひょうき かくきよへいの武略によつて一時漠南ぼくなんに王庭なしといわ

れた元狩げんしゆ以後元鼎げんていへかけての数年を除いては、ここ三十年來

欠かすことなくこうした北辺の災いがつづいていた。霍去病かくきよへいが

死んでから十八年、衛青えいせいが歿ぼつしてから七年。浞野侯趙破奴さくやくこう ちようはど

は全軍を率いて虜ろに降り、光祿勳徐自為こころくくんじよじいの朔北さくほくに築いた城障もたちまち破壊される。全軍の信頼つなを繋ぐに足る將帥しょうすいとしては、わずかに先年大宛だいえんを遠征して武名を挙げた貳師將軍李広りこうりがあるにすぎない。

その年——天漢二年夏五月、——匈奴きやうどの侵略に先立つて、貳師將軍が三万騎に將として酒泉しゆせんを出た。しきりに西辺うかがを窺う匈奴の右賢王うけんおうを天山に撃とうというのである。武帝は李陵に命じてこの軍旅の輜重しちゆうのことに当たらせようとした。未央宮びおうきゆうの武台殿だいでんに召見された李陵は、しかし、極力その役を免ぜられんことを請うた。陵は、飛將軍ひしょうぐんと呼ばれた名將李広りこうの孫。つとに祖父の風ありといわれた騎射きしやの名手で、数年前から騎都尉きとゐとして西

辺しゅせんの酒泉・張掖ちようえきに在あつて射しやを教え兵を練つていたのである。  
 年齢もようやく四十に近い血氣盛りとあつては、輜重しちようの役はあ  
 まりに情けなかつたに違ちがひない。臣が辺境に養うところの兵は皆  
 荆楚けいその一騎当千の勇士なれば、願ねがわくは彼らの一隊を率らいて討うつ  
 て出いで、側面から匈奴の軍を牽制けんせいしたいという陵の嘆願には、  
 武帝うなすも領うなくところがあつた。しかし、相つづく諸方への派兵のた  
 めに、あいにく、陵の軍に割さくべき騎馬の余力がないのである。  
 李陵はそれでも構かわぬといつた。確かに無理とは思おもわれたが、輜し  
ちよう重の役などに当てられるよりは、むしろ己おのれのために身命を惜し  
 まぬ部下五千とともに危あうきを冒おかすほうを選びたかつたのである。  
 臣願ねがわくは少をもつて衆を撃うたんとといつた陵の言葉を、派手はで好き

な武帝は大いに欣よろこんで、その願いを容いれた。李陵は西、張掖ちようえきに戻つて部下の兵を勒ろくするとすぐに北へ向けて進發した。当時居き延よえんに屯たむろしていた疆弩都尉きようどとい路博徳ろはくとくが詔を受けて、陵の軍を中道まで迎えに出る。そこまではよかつたのだが、それから先がすこぶる拙まずいことになつてきた。元來この路博徳ろはくとくという男は古くから霍去病かくきよへいの部下として軍に従い、離侯ふりこうにまで封ぜられ、ことに十二年前には伏波將軍ふくはとして十万の兵を率いて南越なんえつを滅ぼした老将である。その後、法に坐ざして侯を失い現在の地位に墮おとされて西辺を守っている。年齢からいっても、李陵とは父子ほどに違ちがう。かつては封侯ほうこうをも得たその老将がいまさら若い李陵ごときこうじんの後塵こうじんを拝するのがなんとしても不愉快だったのである。彼は



陵の軍を迎えると同時に、都へ使いをやって奏上させた。今まさに秋とて匈奴きょうどの馬は肥え、寡兵かへいをもつてしては、騎馬戦を得意とする彼らの鋭鋒えいほうには些いささか当たりがたい。それゆえ、李陵とにもここに越年し、春を待つてから、酒泉しゅせん・張掖ちやうえきの騎各五千をもつて出撃したほうが得策と信ずるという上奏文である。もちろん、李陵はこのことをしらない。武帝はこれを見ると酷ひどく怒った。李陵が博徳と相談の上での上書と考えたのである。わが前ではあのとおり広言しておきながら、いまさら辺地に行つて急に怯おしけ氣づくとは何事ぞという。たちまち使いが都から博徳と陵の所に飛ぶ。李陵は少をもつて衆を撃たんとわが前で広言したゆえ、汝なんじはこれと協力する必要はない。今匈奴せいがが西河に侵入したとあれ

ば、汝なんじはさつそく陵を残して西河に馳はせつけ敵の道を遮さえぎれ、とい  
 うのが博徳への詔である。李陵への詔には、ただちに漠北ばくほくに至  
 り東は浚稽山しゅんけいざんから南は竜勒水りょうろくすいの辺までを偵察觀望し、も  
 し異状なくんば、浞野侯すくやこうの故道に従つて受降城じゅこうじょうに至つて士  
 を休めよとある。博徳と相談してのあの上書はいつたいなんたる  
 ことぞ、という烈はげしい詰問きつもんのあつたことは言うまでもない。寡か  
 兵へいをもつて敵地に徘徊はいかいすることの危険を別としても、なお、指  
 定されたこの数千里の行程は、騎馬を持たぬ軍隊にとつてははな  
 はだむずかしいものである。徒歩のみによる行軍の速度と、人力  
 による車の牽引けんいん力と、冬へかけての胡地こちの氣候とを考えれば、  
 これは誰にも明らかであつた。武帝はけつして庸王ようおうではなかつ

たが、同じく庸王ではなかつた隋ずいの煬よう帝たいや始皇しこう帝たいなどと共通した長所と短所とを有もつていた。愛あい寵ちよう比ひなき李り夫人ふじんの兄あにたる武じ師し将じやう軍ぐんにしてからが兵力不足のためいつたん、大だい宛えんから引揚ひきあげげようとして帝の逆げき鱗りんにふれ、玉ぎ門もん関かんをとじられてしまつた。その大宛征討も、たかだか善馬がほしいからとて思い立たれたものであつた。帝が一度言出したら、どんな我わが儘ままでも絶対に通されねばならぬ。まして、李陵の場合は、もともと自みづから乞こうた役割でさえある。(ただ季節と距離とに相当に無理な注文があるだけで) 躡ちゆう躡ちゆう躡ちゆうすべき理由はどこにもない。彼は、かくて、「騎兵を伴わぬ北征」に出たのであつた。

浚稽山しゅんけいざんの山間には十日余留とどまつた。その間、日ごとに斥せつこ候うを遠く派して敵状を探つたのはもちろん、附近の山川地形を  
 剩あますところなく図に写しとつて都へ報告しなければならなかつた。  
 報告書は麾下きかの陳歩樂ちんほらくという者が身に帯びて、单身都へ馳はせる  
 のである。選ばれた使者は、李陵りりように一揖いちゆうしてから、十頭に足  
 らぬ少数の馬の中の一匹に打跨うちまたがると、一鞭ひとむちあてて丘かけおを駈下  
 りた。灰色に乾いた漠ばくばく々たる風景の中に、その姿がしだいに小  
 さくなつていくのを、一軍の将士は何か心細い気持で見送つた。  
 十日の間、浚稽山しゅんけいざんの東西三十里の中には一人の胡兵こへいをも見  
 なかつた。

彼らに先だつて夏のうちに天山へと出撃した式師將軍じしはいつた

ん右賢王うけんおうを破りながら、その帰途別の匈奴きょうどの大軍に囲まれて  
 惨敗ざんぱいした。漢兵は十に六、七を討たれ、將軍の一身さえ危うか  
 ったという。その噂うわさは彼らの耳にも届いている。李広利りこうりを破った  
 その敵の主力が今どこのあたりにいるのか？ 今、因※將軍公孫いんこうそん  
 敖ごうが西河・朔方さくほうの辺で禦ふせいでいる（陵と手を分かつた路博徳ろはくとく  
 はその応援に馳はせつけて行つたのだが）という敵軍は、どうも、  
 距離と時間を計ってみるに、問題の敵の主力ではなさそうに思  
 われる。天山から、そんなに早く、東方四千里の河南かなん（オルドス）  
 の地まで行けるはずがないからである。どうしても匈奴きょうどの主力  
 は現在、陵の軍の止营地から北方しつきよすい 居水きすいまでの間あたりに屯たむろし  
 ていなければならぬ勘定になる。李陵自身毎日前山の頂に立つ

て四方を眺めるのだが、東方から南へかけてはただ漠々たる一面の平沙、西から北へかけては樹木に乏しい丘陵性の山々が連なっているばかり、秋雲の間にときとして鷹か隼かと思われる鳥の影を見ることがあつても、地上には一騎の胡兵をも見ないのである。

山峡の疎林の外れに兵車を並べて囲い、その中に帷幕を連ねた陣営である。夜になると、気温が急に下がった。士卒は乏しい木々を折取つて焚いては暖をとった。十日もいるうちに月はなくなつた。空気の乾いているせいか、ひどく星が美しい。黒々とした山影とすれすれに、夜ごと、狼星が、青白い光芒を斜めに曳いて輝いていた。十数日事なく過ごしたのち、明日はいよいよこ

こを立退たちのいて、指定された進路を東南へ向かつて取ろうと決した  
 その晩である。一人の歩哨ほしやうが見るともなくこの爛々らんらんたる狼ろうせ  
 星いを見上げていると、突然、その星のすぐ下の所にすこぶる大  
 きい赤黄色い星が現われた。オヤと思つていゝうちに、その見な  
 れぬ巨おおきな星が赤く太い尾を引いて動いた。と続いて、二つ三つ  
 四つ五つ、同じような光がその周囲に現われて、動いた。思わず  
 歩哨ほしやうが声を立てようとしたとき、それらの遠くの灯ひはフツと一  
 時に消えた。まるで今見たことが夢だったかのように。

歩哨ほしやうの報告に接した李陵りりやうは、全軍に命じて、明朝天明とと  
 もにただちに戦闘に入るべき準備を整えさせた。外に出て一応各  
 部署を点検し終わると、ふたたび幕営に入り、雷らいのごとき鼾かんせい声

を立てて熟睡した。

翌朝李陵が目を醒さまして外へ出て見ると、全軍はすでに昨夜の命令どおりの陣形をとり、静かに敵を待ち構えていた。全部が、兵車を並べた外側に出、戟ほこと盾たてとを持った者が前列に、弓弩きゆうどを手にした者が後列にと配置されているのである。この谷を挟はさんだ二つの山はまだ暁ぎようあん暗あんの中に森閑しんかんとはしているが、そここの巖蔭いわかげに何かのひそんでいるらしい気配けはいがなんとなく感じられる。

朝日の影が谷合にさしこんでくると同時に、（匈奴きようどは、单于ぜんうがまず朝日を拝したのちでなければ事を発しないのである。）  
今まで何一つ見えなかった両山の頂から斜面にかけて、無数の人



影が一時に湧いた。天地を撼がす喊声とともに胡兵は山下に殺到した。胡兵の先登が二十歩の距離に迫ったとき、それまで鳴りをしずめていた漢の陣営からはじめて鼓声が響く。たちまち千弩とともに発し、弦に応じて数百の胡兵はいっせいに倒れた。間髪を入らず、浮足立った残りの胡兵に向かつて、漢軍前列の持戟者らが襲いかかる。匈奴の軍は完全に潰えて、山上へ逃げ上った。漢軍これを追撃して虜首を挙げることに数千。

鮮やかな勝ちっぷりではあつたが、執念深い敵がこのままで退くことはけつしてない。今日の敵軍だけでも優に三万はあつたろう。それに、山上に靡いていた旗印から見れば、紛れもなく単于の親衛軍である。単于がいるものとすれば、八万や十万の後詰め

の軍は当然繰出されるものと覚悟せねばならぬ。李陵は即刻この地を撤退して南へ移ることにした。それもここから東南二千里のじゆうこうじょう受降城へという前日までの予定を変えて、半月前にたど辿つて来たその同じ道を南へ取つて一日も早くもとのきよえんさい居延塞（それとて千数百里離れているが）に入ろうとしたのである。

南行三日めの午ひる、漢軍の後方はるか北の地平線に、雲のごとくこうじん黄塵の揚がるのが見られた。匈奴騎兵の追撃である。翌日はすでに八万の胡兵が騎馬の快速を利して、漢軍の前後左右をすき隙もななく取囲んでしまっていた。ただし、前日の失敗に懲こりたとみえ、至近の距離にまでは近づいて来ない。南へ行進して行く漢軍を遠巻きにしなから、馬上から遠矢を射かけるのである。李陵が全軍

を停<sup>と</sup>めて、戦鬪の体形をとらせれば、敵は馬を駆つて遠く退き、搏<sup>はくせん</sup>戦を避ける。ふたたび行軍をはじめれば、また近づいて来て矢を射かける。行進の速度が著しく減ずるのはもとより、死傷者も一日ずつ確実に殖<sup>ふ</sup>えていくのである。飢え疲れた旅人の後をつける曠野<sup>こうや</sup>の狼のように、匈奴の兵はこの戦法を続けつつ執念深く追つて来る。少しずつ傷つけていった揚句<sup>あげく</sup>、いつかは最後の止<sup>とど</sup>めを刺そうとその機会を窺<sup>うかが</sup>つていたのである。

かつ戦い、かつ退きつつ南行することさらに数日、ある山谷の中で漢軍は一日の休養をとった。負傷者もすでにかんりの数に上つている。李陵<sup>りりよう</sup>は全員を点呼して、被害状況を調べたのち、傷の一か所にすぎぬ者には平生どおり兵器を執<sup>と</sup>つて闘わしめ、両創

を蒙る者にもなお兵車を助け推さしめ、三創にしてはじめて輦に  
乗せて扶け運ぶことに決めた。輸送力の欠乏から屍体はすべて曠  
野に遺棄するほかはなかつたのである。この夜、陣中視察のとき、  
李陵はたまたまある輜重車中に男の服を纏うた女を発見した。  
全軍の車輜について一々調べたところ、同様にしてひそんで  
いた十数人の女が搜し出された。往年関東の群盜が一時に戮に遇  
つたとき、その妻子等が逐われて西辺に遷り住んだ。それら寡婦  
のうち衣食に窮するままに、辺境守備兵の妻となり、あるいは彼  
らを華客とする娼婦となり果てた者が少なくない。兵車中に隠  
れてはるばる漠北まで従い来たつたのは、そういう連中である。  
李陵は軍吏に女らを斬るべくカンタンに命じた。彼女らを伴い来

たった士卒については一言のふれるところもない。濶間たにまの凹地おうちに引出された女どもの疝かんだか高い号ごうきゆう泣がしばらくつづいた後、突然それが夜の沈黙に呑まれたようにフツと消えていくのを、軍幕の中の将士一同は肅しゆくぜん然ぜんたる思いで聞いた。

翌朝、久しぶりで肉薄来襲した敵を迎えて漢の全軍は思いきり快戦した。敵の遺棄屍体したい三千余。連日の執拗しつようなゲリラ戦術に久しくいらだち屈していた士気が俄にわかに奮ふるい立った形である。次の日からまた、もとの竜城りゆうじようの道みちに循したがって、南方への退行が始まる。匈奴きようどはまたしても、元の遠巻き戦術かえに還かえった。五日め、漢軍は、平沙へいさの中なかにときに見出みいされる沼沢地しやうたくちの一つに踏入ふみいった。水は半ば凍り、泥濘でいねいも脛はぎを没する深さで、行けども行けども果

てしない枯葦原が続く。風上に廻った匈奴の一隊が火を放つた。朔風は焰を煽り、真昼の空の下に白っぽく輝きを失った火は、すさまじい速さで漢軍に迫る。李陵はすぐに附近の葦に迎え火を放たしめて、かろうじてこれを防いだ。火は防いだが、沮洳地の車行の困難は言語に絶した。休息の地のないままに一夜泥濘の中を歩き通したのち、翌朝ようやく丘陵地に辿りついたとたん、先廻りして待伏せていた敵の主力の襲撃に遭った。人馬入乱れての搏兵戦である。騎馬隊の烈しい突撃を避けるため、李陵は車を棄てて、山麓の疎林の中に戦鬪の場所を移し入れた。林間からの猛射はすこぶる効を奏した。たまたま陣頭に姿を現わした单于とその親衛隊とに向かつて、一時に連弩を発して乱射し

たとき、单于の白馬は前脚を高くあげて棒立ちとなり、青袍せいほうをまとつた胡主こしゆはたちまち地上に投出された。親衛隊の二騎が馬から下りもせず、左右からさつと单于を掬すくい上げると、全隊がたちまちこれの中に囲んですばやく退いて行つた。乱闘数刻ののちようやく執拗しつような敵を撃退しえたが、確かに今までにない難戦であつた。遺された敵の屍体しかいはまたしても数千を算したが、漢軍も千に近い戦死者を出したのである。

この日捕えた胡虜こりよの口から、敵軍の事情の一端を知ることができた。それによれば、单于ぜんうは漢兵の手強てこわさに驚嘆し、己おのれに二十倍する大軍をも怯おそれず日に日に南下して我を誘うかに見えるのは、あるいはどこか近くに、伏兵があつて、それを恃たのんでいるのでは

ないかと疑っているらしい。前夜その疑いを单于が幹部の諸將に洩もらして事を計ったところ、結局、そういう疑いも確かにありうるが、ともかくも、单于自ら数万騎を率いて漢の寡勢かせいを滅しえぬとあつては、我々の面目に係わるといふ主戦論が勝ちを制し、これより南四、五十里は山谷がつづくがその間力戦猛攻し、さて平地に出で一戦してもなお破りえないとなつたそのときはじめて兵を北に還かえそうといふことに決まつたといふ。これを聞いて、校尉こうい韓延年かんえんねん以下漢軍の幕僚ぼくりょうたちの頭に、あるいは助かるかもしれぬぞといふ希望のようなものが微かすかに湧わいた。

翌日からの胡軍こくんの攻撃は猛烈を極めた。捕虜ほりよの言の中にあつた最後の猛攻といふのを始めたのであろう。襲撃は一日に十数回繰



返された。手巖てきびしい反撃を加えつつ漢軍は徐々に南に移つて行く。三日経たつと平地に出た。平地戦になると倍加される騎馬隊の威力にものを言わせ匈奴きようどらは遮しや二無にむに二漢軍を圧倒しようとかかったが、結局またも二千の屍体したいを遺のこして退いた。捕虜の言が偽りでなければ、これで胡軍は追撃を打切るはずである。たかが一兵卒の言つた言葉ゆえ、それほど信頼できるとは思わなかつたが、それでも幕僚ぼくりよう一同いささ些さかホツとしたことは争えなかつた。

その晩、漢の軍侯ぐんこう、管敢かんかんという者が陣を脱して匈奴の軍に亡くだげ降くだつた。かつて長安ちやうあん都下の悪少年だつた男だが、前夜斥せ候こう上の手抜きについて校尉こうい・成安侯せいあんこう韓延年かんえんねんのために衆人の前で面罵めんばされ、笞打むちたれた。それを含んでこの拳に出たのであ

る。先日溪間たにまで斬ざんに遭つた女どもの一人が彼の妻だったとも言ふ。管敢は匈奴の捕虜の自供した言葉を知つていた。それゆえ、胡陣こしんに亡にげて单于ぜんうの前に引出されるや、伏兵を懼おそれて引上げる必要のないことを力説した。言う、漢軍には後援がない。矢もほとんど尽きようとしている。負傷者も続出して行軍は難なん澁じゆうを極めてゐる。漢軍の中心をなすものは、李將軍りおよび成安侯韓延年の率ゐる各八百人だが、それぞれ黄と白との幟しをもつて印としているゆえ、明日胡騎こきの精銳をしてそこに攻撃を集中せしめてこれを破つたなら、他は容易に潰滅かいめつするであろう、云々うんぬん。单于ぜんうは大いに喜んで厚く敢を遇し、ただちに北方への引上げ命令を取消した。

翌日、李陵りりよう韓延年かんえんねん速すみかに降くだれと疾呼しつこしつつ、胡軍の最精銳

は、黄白の幟しを目ざして襲いかかった。その勢いに漢軍は、しだいに平地から西方の山地へと押されて行く。ついに本道から遙はるかに離れた山谷の間に追込まれてしまった。四方の山上から敵は矢を雨のごとくに注そそいだ。それに応戦しようにも、今や矢が完全に尽きてしまった。遮しやり虜よしようを出るとき各人が百本ずつ携えた五十万本の矢がごとごとく射尽くされたのである。矢ばかりではない。全軍の刀とう槍そう矛ぼう戟げきの類も半ばは折れ欠けてしまった。文字どおり刀折れ矢尽きたのである。それでも、戟ほこを失ったものは車し輻やくを斬きつてこれを持ち、軍吏ぐんりは尺せき刀とうを手にして防戦した。谷は奥へ進むに従っていよいよ狭せまくなる。胡卒こそつは諸所がけの崖の上から大石を投下しはじめた。矢よりもこのほうが確実に漢軍の死傷者

を増加させた。死屍ししと纍石るいせきとでもはや前進も不可能になつた。

その夜、李陵は小袖短衣しょうしゅうたんいの便衣べんいを着け、誰もついて来るな

と禁じて独り幕營の外に出た。月が山の峽かいから覗のぞいて谷間に堆うずたかい

屍しかばねを照らした。浚稽山しゅんけいざんの陣を撤するときは夜が暗かつたのに、

またも月が明るくなりはじめたのである。月光と滿地の霜とで片か

岡たおかの斜面は水に濡ぬれたように見えた。幕營の中に残つた将士は、

李陵の服装からして、彼が單身敵陣を窺うかがつてあわよくば单于と刺

違える所存に違いないことを察した。李陵はなかなか戻つて来な

かつた。彼らは息をひそめてしばらく外の様子を窺うかがつた。遠く山

上の敵壘から胡笳こかの聲が響く。かなり久しくたつてから、音もな

く帷とばりをかかげて李陵が幕の内にはいつて来た。だめだ。と一言吐

き出すように言うと、踞ぎよ 牀しように腰おろを下した。全軍斬死ざんしのほか、  
 途みちはないようだと、またしばらくしてから、誰に向かつてとも  
 なく言つた。満座口を開く者はない。ややあつて軍吏ぐんりの一人が口  
 を切り、先年浞野侯さくやこう 趙破奴ちやうはどが胡軍こぐんのために生擒いけどられ、数年後  
 に漢に亡にげ歸つたときも、武帝はこれを罰しなかつたことを語つ  
 た。この例から考えても、寡兵かへいをもつて、かくまで匈奴きやうどを震しんが  
 駭いさせた李陵りりようであつてみれば、たとえ都へのがれ歸つても、  
 天子はこれをを遇する途みちを知りたもうであらうといふのである。李  
 陵はそれをを遮さえぎつて言う。陵一個のことはしばらく措おけ、とにかく、  
 今数十矢もあれば一応は囲みを脱出することもできようが、一本  
 の矢もないこの有様ありさまでは、明日の天明には全軍が坐ざして縛ばくを受

けるばかり。ただ、今夜のうちに囲みを突いて外に出、各自鳥獸と散じて走つたならば、その中にはあるいは辺塞へんさいに辿りついで、天子に軍状を報告しうる者もあるかもしれない。案ずるに現在の地点は、ていかんざん汗山北方の山地に違ひなく、居延きよえんまではなお数日の行程ゆえ、成否のほどはおぼつかないが、ともかく今となつては、そのほかに残された途みちはないではないか。諸將僚もこれに領うなずいた。全軍の將卒に各二升の糲ほしいいと一個の冰ひようへん片とが頒わかたれ、遮しやにむに二無二、しやりよしやう遮虜しやりよしやうに向かつて走るべき旨がふくめられた。さて、一方、ことごとく漢陣の旌旗せいぎを倒しこれを斬きつて地中に埋めたのち、武器兵車等の敵に利用されうる懼おそれのあるものも皆打毀うちこわした。夜半、鼓こして兵を起こした。軍鼓ぐんこの音も慘さんとして響かぬ。李陵は韓か

校尉けんこういとともに馬に跨またがり壯士十余人を従えて先登せんとうに立った。  
この日追い込まれた峽きやうこく谷の東の口を破つて平地に出、それから南へ向けて走ろうというのである。

早い月はすでに落ちた。胡虜こりよの不意を衝ついて、ともかくも全軍の三分の二は予定どおり峽谷の裏口を突破した。しかしすぐに敵の騎馬兵の追撃に遭あつた。徒歩の兵は大部分討たれあるいは捕えられたようだったが、混戦に乗じて敵の馬を奪つた数十人は、その胡馬こばに鞭むちうつて南方へ走つた。敵の追撃をふり切つて夜目にもぼつと白い平沙へいさの上を、のがれ去つた部下の数を数えて、確かに百に余ることを確かめうると、李陵りりようはまた峽谷の入口の修羅場しゆらばにとつて返した。身には数創を帯び、自みづからの血と返り血とで、戎じ

衣ゆういは重く濡ぬれていた。彼と並んでいた韓延年かんえんねんはすでに討たれて戦死していた。麾下きかを失い全軍を失つて、もはや天子に見ゆべき面目はない。彼は戟ほこを取直すと、ふたたび乱軍の中に駈入かけいつた。暗い中で敵味方も分らぬほどの乱闘のうちに、李陵の馬が流矢ながれやに当たつたとみえてガツクリ前にのめつた。それとどちらが早かつたか、前なる敵を突こうと戈ほこを引いた李陵は、突然背後から重量のある打撃を後頭部に喰くらつて失神した。馬から顛落てんらくした彼の上に、生擒いけどろうと構えた胡兵こへいどもが十重二十重とえはたえとおり重なつて、とびかかった。



九月に北へ立つた五千の漢軍かんぐんは、十一月にはいつて、疲れ傷ついで將を失つた四百足らずの敗兵となつて辺塞へんさいに辿りつたどいた。敗報はただちに馭伝えきでんをもつて長安ちやうあんの都に達した。

武帝ぶていは思いのほか腹を立てなかつた。本軍たる李広利りこうりの大軍さえ惨敗ざんぱいしているのに、一支隊たる李陵の寡軍かくんにたいした期待のもてよう道理がなかつたから。それに彼は、李陵が必ずや戦死しているに違ちがひないとも思つていたのである。ただ、先ごろ李陵の使しいとして漠北ぼくほくから「戦線異状なし、士氣すこぶる旺盛おうせい」の報をもたらしした陳歩樂ちんほらくだけは（彼は吉報の使者として嘉よみせられ郎ろうとなつてそのまま都に留とどまっていた）成行上せいこうじやうどうしても自殺し

なければならなかった。哀れではあつたが、これはやむを得ない。

翌、天漢三年の春になつて、李陵は戦死したのではない。

捕えられて虜に降つたのだという確報が届いた。武帝をはじめて

嚇怒した。即位後四十余年。帝はすでに六十に近かつたが、氣象

の烈しさは壮時に超えている。神仙の説を好み方士巫覡の類を

信じた彼は、それまでに己の絶対に尊信する方士どもに幾度か欺

かれていた。漢の勢威の絶頂に当たつて五十余年の間君臨したこ

の大皇帝は、その中年以後ずっと、靈魂の世界への不安な関心に

執拗につきまとわれていた。それだけに、その方面での失望は

彼にとつて大きな打撃となつた。こうした打撃は、生来闊達だ

つた彼の心に、年とともに群臣への暗い猜疑を植えつけていった。

李蔡・青霍・趙周と、丞相たる者は相ついで死罪に行  
 なわれた。現在の丞相たる公孫賀のごとき、命を拝したときに  
 己が運命を恐れて帝の前で手離して泣出したほどである。硬骨  
 漢汲黯が退いた後は、帝を取巻くものは、佞臣にあらず  
 んば酷吏であつた。

さて、武帝は諸重臣を召して李陵の処置について計つた。李陵  
 の身体は都にはないが、その罪の決定によつて、彼の妻子眷属  
 家財などの処分が行なわれるのである。酷吏として聞こえた一廷  
 尉が常に帝の顔色を窺い合法的に法を枉げて帝の意を迎えること  
 に巧みであつた。ある人が法の権威を説いてこれを詰つたところ、  
 これに答えていう。前主の是とするところこれが律となり、後主

の是とするところこれが令りようとなる。当時の君主の意のほかになんの法があろうぞと。群臣皆この廷尉の類であつた。丞じよう相公しようこう孫賀んが、御史大夫杜周ぎよしたいふとしゆう、太常たいじよう、趙弟ちようてい以下、誰一人として、帝の震怒しんんどを犯してまで陵のために弁じようとする者はない。口を極めて彼らは李陵の売国的行為ののしを罵る。陵のごとき変節漢へんせつかんと肩を比べて朝ちように仕えていたことを思うといまさらながら愧はずかしいと言出した。平生の陵の行為の一つ一つがすべて疑わしかつたことに意見が一致した。陵の従弟いしこに当たたる李敢りかんが太子の寵ちようを頼たのんで驕恣きようしであることまでが、陵への誹謗ひぼうの種子になつた。口を緘かんして意見を洩もらさぬ者が、結局陵に対して最大の好意を有もつものだつたが、それも数えるほどしかない。

ただ一人、苦々しい顔をしてこれらを見守っている男がいた。

今口を極めて李陵を讒誣ざんぶしているのは、数か月前李陵が都を辞す

るときに盃さかずきをあけて、その行を壮さかんにした連中ではなかったか。

漠ばくほく北からの使者が来て李陵の軍の健在を伝えたとき、さすがは

名将李広りこうの孫と李陵の孤軍奮闘を讃たたえたのもまた同じ連中ではな

いのか。恬てんとして既往を忘れたふりのできる顯官けんかん連や、彼らの

諂諛てんゆを見破るほどに聡明そうめいではありながらなお真実に耳を傾ける

ことを嫌きらう君主が、この男には不思議に思われた。いや、不思議

ではない。人間がそういうものとは昔からいやになるほど知って

はいるのだが、それにしてもその不愉快さに変わりはないのであ

る。下大夫かたいふの一人として朝ちようにつらなっていたために彼もまた下問

を受けた。そのとき、この男はハッキリと李陵を褒め上げた。言  
 う。陵の平生を見るに、親に事えて孝、士と交わつて信、常に奮  
 つて身を顧みずもつて国家の急に殉ずるは誠に国士のふうありと  
 いうべく、今不幸にして事一度破れたが、身を全うし妻子を保ん  
 ずることをのみただ念願とする君側の佞人ばらだが、この陵の一  
 失を取上げてこれを誇大歪曲してもつて上の聰明を蔽おうと  
 しているのは、遺憾この上もない。そもそも陵の今回の軍たる、  
 五千にも満たぬ歩卒を率いて深く敵地に入り、匈奴数万の師を  
 奔命に疲れしめ、転戦千里、矢尽き道窮まるに至るもなお全軍  
 空弩を張り、白刃を冒して死闘している。部下の心を得てこれ  
 に死力を尽くさしむること、古の名将といえどもこれには過ぎま

い。軍敗れたりとはいえ、その善戦のあとにはまさに天下に顕彰するに足る。思うに、彼が死せずして虜ろに降くだつたというのも、ひそかにかの地にあつて何事か漢に報いんと期してのことではあるまいか。……

並いる群臣は驚いた。こんなことのいえる男が世にいようとは考えなかつたからである。彼らはこめかみを顛ふわせた武帝の顔を恐る恐る見上げた。それから、自分らをあえて全くをまつとうしさいしをた 軀 保 妻 子もつの臣と呼んだこの男を待つものが何であるかを考えて、ニヤリとするのである。

向こう見ずなその男——太史たいし令れい・司馬しば遷せんが君前を退くと、すくをまつとうしさいしをたもつぐに、「全 軀 保 妻 子の臣」の一人が、遷せんと李り陵りょうとの

親しい関係について武帝の耳に入れた。太史令は故あつて弑師將軍と隙あり、遷が陵を褒めるのは、それによつて、今度、陵に先立つて出塞して功のなかつた弑師將軍を陥れんがためであると言ふ者も出てきた。ともかくも、たかが星曆卜祀を司るにすぎぬ太史令の身として、あまりにも不遜な態度だというのが、一同の一致した意見である。おかしなことに、李陵の家族よりも司馬遷のほうが先に罪せられることになつた。翌日、彼は廷尉に下された。刑は宮と決まつた。

支那で昔から行なわれた肉刑の主なるものとして、黥、劓

(はなきる)、(あしきる)、宮、の四つがある。武帝の祖父

文帝のとき、この四つのうち三つまでは廃せられたが、宮



刑けいのみはそのまま残された。宮刑とはもちろん、男を男でなくする奇怪な刑罰である。これを一に腐刑ふけいともいうのは、その創きずが腐臭を放つがゆえだともいい、あるいは、腐木ふぼくの実を生ぜざるがごとき男と成り果てるからだともいう。この刑を受けた者を闈えんじ人と称し、宮廷の宦官かんがんの大部分がこれであつたことは言うまでもない。人もあろうに司馬遷しばせんがこの刑に遭あつたのである。しかし、後代の我々が史記しきの作者として知っている司馬遷は大きな名前だが、当時の太史令たいしれい司馬遷しばせんは眇びようたる一文筆の吏りにすぎない。頭腦の明めい晰せきなことは確かとしてもその頭腦に自信をもちすぎた、人づき合ひの悪い男、議論においてけつして他人ひとに負けない男、たかだか強情我慢の偏窟人へんくつじんとしてしか知られていなかつた。彼

が腐刑ふけいに遇あつたからとて別に驚く者はない。

司馬氏は元周もとじゆうの史官であつた。後、晋しんに入り、秦しんに仕え、漢かんの代となつてから四代目の司馬談しばたんが武帝に仕えて建元けんげん年間に太史令たいしれいをつとめた。この談が遷の父である。専門たる律・曆・易りつれきえきのほか道家どうかの教えに精くわしくまた博く儒ひろじゆ、墨ぼく、法ほう、名めい、諸家しよかの説にも通じていたが、それらをすべて一家の見をもつて綜すべて自己のものとしていた。己おのれの頭脳や精神力についての自信の強さはそっくりそのまま息子むすこの遷うけつに受嗣うけつがれたところのものである。彼が、息子に施した最大の教育は、諸学の伝授を終えてのちに、海内かいだいの大旅行をさせたことであつた。当時としては変わった教育法であつたが、これが後年の歴史家司馬遷に資するところのすこぶる

大であつたことは、いうまでもない。

元封元年に武帝が東、泰山に登つて天を祭つたとき、たま

たま周南で病床にあつた熱血漢司馬談は、天子始めて漢家

の封を建つるめでたきときに、己一人従つてゆくことのできぬの

を慨き、憤を発してそのために死んだ。古今を一貫せる通史の編

述こそは彼の一生の念願だつたのだが、単に材料の蒐集のみ

で終わつてしまつたのである。その臨終の光景は息子・遷の

筆によつて詳しく史記の最後の章に描かれている。それによると

司馬談は己のまた起ちがたきを知るや遷を呼びその手を執つて、

懇ろに修史の必要を説き、己太史となりながらこのことに着手

せず、賢君忠臣の事蹟を空しく地下に埋もれしめる不甲斐なさを

慨なげいて泣いた。「予よ死せば汝なんじ必ず太史とならん。太史とならばわが論著せんと欲するところを忘るるなかれ」といい、これこそ己に対する孝の最大なものだとして、爾なんじそれ念おもえやと繰返したとき、遷は俯ふし首流ゆりゆう涕ていしてその命に背そむかざるべきを誓つたのである。

父が死んでから二年ののち、はたして、司馬遷しばせんは太史令たいしれいの職を継いだ。父の蒐しゅう集しゅうした資料と、宮廷所蔵の秘冊とを用いて、すぐにも父子相伝ふしそうでんの天職にとりかかりたかつたのだが、任官後の彼にまず課せられたのは暦の改正という事業であつた。この仕事に没頭することちようど満四年。太初たいしよ元年にようやくこれを仕上げる、すぐに彼は史記しきの編纂へんさんに着手した。遷、ときに年四十二。

腹案はとうにでき上がっていた。その腹案による史書の形式は従来の史書のどれにも似ていなかった。彼は道義的批判の規準を示すものとしてはしゅんじゆう春 秋を推したが、事実を伝える史書としてはなんとしてもあきたらなかつた。もつと事実が欲しい。教訓よりも事実が。さでん左伝やこくご国語になると、なるほど事実はある。左伝の叙事の巧妙さに至つては感嘆のほかはない。しかし、その事実を作り上げる一人一人の人についての探求がない。事件の中における彼らの姿の描出はあや鮮やかであつても、そうしたことをしてかすままでに至る彼ら一人一人の身許みもと調べの欠けているのが、しばせん司馬遷には不服だつた。それに従来の史書はすべて、当代の者に既往をしらしめることが主眼となつていて、未来の者に当代をしらしめる

ためのものとしての用意があまりに欠けすぎているようである。要するに、司馬遷の欲するものは、在来の史には求めて得られなかった。どういう点で在来の史書があきたらぬかは、彼自身でも自ら欲するところを書上げてみてはじめて判然する底ていのものと思われた。彼の胸中にあるモヤモヤと鬱積うっせきしたものを書き現わすことの要求のほうが、在来の史書に対する批判より先に立った。いや、彼の批判は、自ら新しいものを創つくるといふ形でしか現われないのである。自分が長い間頭の中で画えがいてきた構想が、史といえるものか、彼には自信はなかった。しかし、史といえてもいえずなくても、とにかくそういうものが最も書かれなければならぬものだ（世人にとって、後代にとって、なかならず己自身にとつ

て」という点については、自信があつた。彼も孔子こうしに倣ならつて、述べて作らぬ方針をとつたが、しかし、孔子のそれとはたぶん内容ことを異ことにした述のべてつくらず而不作である、司馬遷にとつて、単なる編年体の事件列挙はいまだ「述べる」の中にはいらぬものだったし、また、後世人の事実そのものを知ることが妨げるような、あまりにも道義的な断案は、むしろ「作る」の部類にはいるように思われた。

漢が天下を定めてからすでに五代・百年、始皇帝しこうていの反文化政策によつて湮滅いんめつしあるいは隠匿いんとくされていた書物がようやく世に行なわれはじめ、文おこの興おこらんとする気運が鬱勃うつぼつとして感じられた。漢の朝廷ばかりでなく、時代が、史の出現を要求している

ときであつた。司馬遷個人としては、父の遺囑による感激が学殖・観察眼・筆力の充実を伴つてようやく渾然たるものを生み出すべく醜醉しかけてきていた。彼の仕事は実に気持よく進んだ。むしろ快調に行きすぎて困るくらいであつた。というのは、初めの五帝本紀から夏殷周秦本紀あたりまでは、彼も、材料を安排して記述の正確嚴密を期する一人の技師に過ぎなかつたのだが、始皇帝を経て、項羽本紀にはいるころから、その技術家の冷静さが怪しくなつてきた。ともすれば、項羽が彼に、あるいは彼が項羽にのり移りかねないのである。

項王則子夜起キテ帳中ニ飲ス。美人有リ。名ハ虞。常ニ幸セラレテ従フ。駿馬名ハ騏、常ニ之二騎ス。是ニ於テ項王乃子悲歌



慷慨こうがいシ自ラ詩ヲ為リテ曰ク「力山ヲ抜キ氣世ヲ蓋フ、時利アラズ  
 雖逝ゆカズ、雖逝カズ奈何いかんスベキ、虞ヤ虞なんじヤ若ヲ奈何いかニセン」ト。  
 歌フコト数けつ、美人之ニ和ス。項王泣数行下ル。左右皆泣キ、能  
 ク仰ギ視ルモノ莫シ……。

これでいいのか？ と司馬遷は疑う。こんな熱に浮かされたよ  
 うな書きっぷりでいいものだろうか？ 彼は「作ル」ことを極度  
 に警戒した。自分の仕事は「述ベル」ことに尽きる。事実、彼は  
 述べただけであった。しかしなんと生氣澆はつらつ刺たる述べ方であつ  
 たか？ 異常な想像的視覚を有もつた者でなければとうてい不能な  
 記述であつた。彼は、ときに「作ル」ことを恐れるのあまり、す  
 でに書いた部分を読返してみても、それあるがために史上の人物が

現実の人物のごとくに躍動すると思われる字句を削る。すると確かにその人物はハツラツたる呼吸を止める。これで、「作ル」ことになる心配はないわけである。しかし、（と司馬遷が思うに）これでは項羽が項羽でなくなるではないか。項羽も始皇帝も楚の莊王もみな同じ人間になつてしまふ。違つた人間を同じ人間として記述することが、何が「述べる」だ？ 「述べる」とは、違つた人間は違つた人間として述べることではないか。そう考え てくると、やはり彼は削つた字句をふたたび生かさないわけには いかない。元どおりに直して、さて一読してみても、彼はやつと落ちつく。いや、彼ばかりではない。そこにかかれた史上の人物が、項羽や樊噲や范增が、みんなようやく安心してそれぞれの場

所に落ちつくように思われる。

調子のよいときの武帝ぶていは誠まことに高邁こうまい闊達かつたつな・理解ある文教の保護者だったし、太史令たいしれいという職が地味な特殊な技能を要するものだったために、官界につきものの朋党ほうとう比周ひしゅうの擠陷せいかん讒誣ざんぶによる地位（あるいは生命）の不安定からも免れることができた。

数年の間、司馬遷は充実した・幸福とっていい日々を送った。（当時の人間の考える幸福とは、現代人のそれと、ひどく内容の違うものだったが、それを求めることに変わりはない。）妥協性はなかったが、どこまでも陽性で、よく論じよく怒りよく笑いなかんずく論敵を完膚かんぷなきまでに説破することを最も得意としていた。

さて、そうした数年ののち、突然、この禍が降つたのである。

薄暗い蚕室さんしつの中で——腐刑ふけい施術後当分の間は風に当たること  
を避けねばならぬので、中に火を熾おこして暖かに保つた・密閉した  
暗室を作り、そこに施術後の受刑者を数日の間入れて、身体を養  
わせる。暖かく暗いところが蚕を飼う部屋に似ているとて、それ  
を蚕室と名づけるのである。——言語を絶した混乱のあまり彼は  
茫然ぼうぜんと壁によりかかった。憤激よりも先に、驚きのようなもの  
さえ感じていた。斬ざんに遭あうこと、死を賜たまうことに対してなら、彼  
にはもとより平生から覚悟ができていた。刑死けいしする己おのれの姿なら想  
像してみることもできるし、武帝の気に逆らつて李陵りりやうを褒ほめ上

げたときもまかりまちがえば死を賜うようなことになるかもしれない。ぬくらしいの懸念けねんは自分にもあつたのである。ところが、刑罰も数ある中で、よりによつて最も醜しゆうろう陋ろうな宮きゆうけい刑けいにあおうとは！

迂闊うかつといえは迂闊だが、（というのは、死刑を予期するくらいなら当然、他のあらゆる刑罰も予期しなければならぬわけだから）彼は自分の運命の中に、不測の死が待受けているかもしれない。ぬとは考えていたけれども、このような醜いものが突然現われようとは、全然、頭から考えもしなかつたのである。常々、彼は、人間にはそれぞれその人間にふさわしい事件しか起こらないのだという一種の確信のよなものを有もつていた。これは長い間史実を扱っているうちに自然に養われた考えであつた。同じ逆境にして

も、慷慨こうがいの士には激しい痛烈な苦しみが、軟弱の徒とには緩慢な  
じめじめした醜い苦しみが、というふうにある。たとえ始めは  
一見ふさわしくないように見えても、少なくともその後の対処の  
し方によつてその運命はその人間にふさわしいことが判わかつてくる  
のだと。司馬遷しばせんは自分を男だと信じていた。文筆の吏りではあつて  
も当代のいかなる武人ぶじんよりも男であることを確信していた。自分  
でばかりではない。このことだけは、いかに彼に好意を寄せぬ者  
でも認めないわけにはいかないうであつた。それゆえ、彼は自  
らの持論に従つて、車裂くるまぎの刑なら自分の行く手に思い画えがくこ  
とができたのである。それが齡五十よわいに近い身で、この辱はずかしめにあ  
おうとは！ 彼は、今自分が蚕室さんしつの中にいるということが夢の

ような気がした。夢だと思いたかった。しかし、壁によって閉じていた目を開くと、うす暗い中に、生氣のない・魂までが抜けたような顔をした男が三、四人、だらしなく横たわったりすわったりしているのが目にはいった。あの姿が、つまり今の己なのだと思つたとき、嗚咽おえつとも怒号どごうともつかない叫びが彼の咽喉のどを破つた。痛憤はんもんと煩悶はんもんとの数日のうちには、ときに、学者としての彼の習慣からくる思索が——反省が来た。いつたい、今度の出来事の中で、何が——誰が——誰のどういふところが、悪かつたのだという考えである。日本の君臣道とは根柢こんていから異なつた彼の国のこととて、当然、彼はまず、武帝を怨うらんだ。一時はその怨懣えんまんだけで、いっさい他を顧みる余裕はなかつたというのが實際であつ

た。しかし、しばらくの狂乱の時期の過ぎたあとには、歴史家としての彼が、目覚めてきた。儒者じゆしゃと違つて、先王の価値にも歴史家的な割引をすることを知っていた彼は、後王たる武帝の評価の上にも、私怨しえんのために狂いを来たさせることはなかつた。なんといつても武帝は大君主である。そのあらゆる欠点にもかかわらず、この君がある限り、漢の天下は微動だもしない。高祖はしばらく措おくとするも、仁君じんくん文帝ぶんていも名君けいてい景帝も、この君に比べれば、やはり小さい。ただ大きいものは、その欠点までが大きく写ってくるのは、これはやむを得ない。司馬遷しばせんは極度の憤怨ふんえんのうちにあつてもこのことを忘れてはいない。今度のことは要するに天の作なせる疾風暴雨へきれき霹靂へきれきに見舞われたものと思うほかはない



という考えが、彼をいつそう絶望的な憤りへと駆つたが、また一方、逆に諦観へも向かわせようとする。怨恨が長く君主に向かい得ないとなると、勢い、君側の姦臣に向けられる。彼らが悪い。たしかにそうだ。しかし、この悪さは、すこぶる副次的な悪さである。それに、自矜心の高い彼にとつて、彼ら小人輩は、怨恨の対象としてさえ物足りない気がする。彼は、今度ほど好人物というものへの腹立ちを感じたことはない。これは姦臣や酷吏よりも始末が悪い。少なくとも側から見ていて腹が立つ。良心的に安つぽく安心しており、他にも安心させるだけ、いつそう怪しからぬのだ。弁護もしなければ反駁もせぬ。心中、反省もなければ自責もない。丞相公孫賀のごとき、その代

表的なものだ。同じ阿諛迎あゆげいごう合を事としても、杜周としゆう（最近この男は前任者王卿おうけいを陥れてまんまと御史大夫ぎよしたいふとなりおおせた）のような奴やつは自らそれと知っているに違いないがこのお人好しの丞相くをまつとうしさいしをたもときた日には、その自覚さえない。自分に全くをまつとうしさいしをたも軀保妻くをまつとうしさいしをたも子の臣つといわれても、こういう手合いは、腹も立てないのだから。こんな手合いは恨みを向けるだけの値打ちさえもない。

司馬遷は最後に忿懣ふんまんの持つて行きどころを自分に求めようとする。実際、何ものかに対して腹を立てなければならぬとすれば、結局それは自分自身に対してのほかはなかつたのである。だが、自分のどこが悪かつたのか？ 李陵りりようのために弁じたこと、これはいかに考えてみてもまちがっていたとは思えない。方法的にも

格別拙ますかつたとは考えぬ。阿諛あゆに墮だするに甘んじないかぎり、あれはあれでどうしようもない。それでは、自ら顧みてやましくなければ、そのやましくない行為が、どのような結果を来たそうとも、士たる者はそれを甘かん受じゆしなければならぬはずだ。なるほどそれは一応そうに違いない。だから自分も肢解しかいされようと腰ようぎ斬んにあおうと、そういうものなら甘んじて受けるつもりなのだ。しかし、この宮きゆう刑けいは——その結果かく成り果てたわが身の有様というものは、——これはまた別だ。同じ不具でも足を切られたり鼻を切られたりするのは全然違った種類のものだ。士たる者の加えられるべき刑ではない。こればかりは、身体しんたいのこういう状態じょうたいというものは、どういう角度から見ても、完全な悪だ。飾しよく

言げんの余地はない。そうして、心の傷だけならば時とともに癒いえることもあるが、己おのが身体おののこの醜悪な現実は死に至るまでつづくのだ。動機がどうであろうと、このような結果を招くものは、結局「悪かった」といわなければならぬ。しかし、どこが悪かった？ 己おのれのどこが？ どこも悪くなかった。己は正しいことしかなかった。強しいていえば、ただ、「我あり」という事実だけが悪かったのである。

茫ぼうぜん然ぜんとした虚脱きよだつの状態ですわっていたかと思うと、突然飛

上り、傷ついた獣のごとくうめきながら暗く暖かい室の中を歩き廻まわる。そうしたしぐさを無意識に繰返しつつ、彼の考えもまた、いつも同じ所をぐるぐる廻まわってばかりいて帰結するところを知ら

ないのである。

我を忘れ壁に頭を打ちつけて血を流したその数回を除けば、彼は自らを殺そうと試みなかった。死にたかった。死ねたらどんなによからう。それよりも数等恐ろしい恥辱が追立てるのだから死をおそれる気持は全然なかった。なぜ死ねなかったのか？ 獄舎の中に、自らを殺すべき道具のなかったことにもよろう。しかし、それ以外に何か内から彼をとめる。はじめ、彼はそれがなんであるかに気づかなかつた。ただ狂乱と憤懣ふんまんとの中で、たえず発ほ作的つさに死への誘惑を感じたにもかかわらず、一方彼の気持を自殺のほうへ向けさせたがらないものがあるのを漠然ぼくぜんと感じていた。何を忘れたのかはハッキリしないながら、とにかく何か忘れもの

をしたような氣のすることがある。ちようどそんなぐあいであつた。

許されて自宅に帰り、そこで謹慎きんしんするようになってから、はじめ、彼は、自分がこの一月狂乱ひとにとり紛まぎれて己おのが畢生ひっせいの事業しゅうしたる修史しゅうしのことを忘れ果はてていたこと、しかし、表面は忘れていたにもかかわらず、その仕事への無意識の関心が彼を自殺はばから阻はばむ役目を隠いんいん々のうちにつとめていたことに気がついた。

十年前臨りんじゅう終とこの床で自分の手をとり泣いて遺命いめいした父の慟そくそ々くたる言葉は、今なお耳底じていにある。しかし、今疾痛しつづう慘怛さんたんを極きわめた彼の心の中に在あつてなお修史の仕事を思い絶たしめないものは、その父の言葉ばかりではなかった。それは何よりも、その

仕事そのものであつた。仕事の魅力とか仕事への情熱とかいう<sup>たの</sup>しい態<sup>てい</sup>のものではない。修史という使命の自覚には違いないとしてもさらに昂<sup>こうぜん</sup>然として自らを恃<sup>じ</sup>する自覚ではない。恐ろしく我<sup>が</sup>の強い男だつたが、今度のこと、己<sup>おのれ</sup>のいかにとるに足らぬものだつたかをしみじみと考えさせられた。理想の抱負のと威張<sup>いば</sup>つてみたところで、所<sup>しよせん</sup>詮己は牛にふみつぶされる道<sup>みち</sup>傍<sup>ばた</sup>の虫けらのごときものにすぎなかつたのだ。「我」はみじめに踏みつぶされたが、修史という仕事の意義は疑えなかつた。このような浅ましい身と成り果て、自信も自恃<sup>じじ</sup>も失いつくしたのち、それでもなお世にながらえてこの仕事に従うということは、どう考えても怡<sup>たの</sup>しいわけはなかつた。それはほとんど、いかにいとわしくとも最後

までその関係を絶つことの許されない人間同士のような宿命的な因縁いんねんに近いものと、彼自身には感じられた。とにかくこの仕事のために自分は自らを殺すことができぬのだ（それも義務感からではなく、もっと肉体的な、この仕事との繋がりつなによってである）ということだけはハツキリしてきた。

当座の盲目的な獣の呻うめき苦しみに代わって、より意識的な・人間の苦しみが始まった。困ったことに、自殺できないことが明らかになるにつれ、自殺によつてのほかに苦悩と恥辱とから逃れる途みちのないことがますます明らかになってきた。一個の丈夫じょうぶたる太史令たいしれい司馬遷しばせんは天漢てんかん三年の春に死んだ。そして、そののちに、彼の書残した史をつづける者は、知覚も意識もない一つの書写機



械にすぎぬ、——自らそう思い込む以外に途はなかつた。無理でも、彼はそう思おうとした。修史の仕事は必ず続けられねばならぬ。これは彼にとって絶対であつた。修史の仕事のつづけられるためには、いかにたえがたくとも生きながらえねばならぬ。生きながらえるためには、どうしても、完全に身を亡きものと思ひ込む必要があつたのである。

五月のち、司馬遷はふたたび筆を執つた。歡びも昂奮もない・ただ仕事の完成への意志だけに鞭打たれて、傷ついた脚を引摺りながら目的地へ向かう旅人のように、とぼとぼと稿を継いでいく。もはや太史令の役は免ぜられていた。些か後悔した武帝が、しばらく後に彼を中書令に取立てたが、官職の黜陟のご

ときは、彼にとつてもうなんの意味もない。以前の論客司馬遷は、一切口を開かずなつた。笑うことも怒ることもない。しかし、けつしてしやうぜん悄然たる姿ではなかつた。むしろ、何かあくりよう悪霊にでも取り憑つかれていようなすさまじさを、人々は緘かん黙もくせる彼の風貌ふうぼうの中に見て取つた。夜眠る時間をも惜しんで彼は仕事をつづけた。一刻も早く仕事を完成し、そのうえで早く自殺の自由を得たいとあせっているもののように、家人らには思われた。

せいさん凄惨な努力を一年ばかり続けたのち、ようやく、生きることよろこの歡びを失いつくしたのちもなお表現することの歡びだけは生残りうるものだということを、彼は発見した。しかし、そのころになつてもまだ、彼の完全な沈黙は破られなかつたし、風貌ふうぼうの中

のすさまじさも全然和らげられはしない。稿をつづけていくうちに、宦者とか閹奴とかいう文字を書かなければならぬところに来ると、彼は覚えぬ呻き声を発した。独り居室にいるときでも、夜、牀上に横になつたときでも、ふとこの屈辱の思いが萌してくると、たちまちカーツと、焼鏝をあてられるような熱い疼くものが全身を駈けめぐる。彼は思わず飛上り、奇声を発し、呻きつつ四辺を歩きまわり、さてしばらくしてから齒をくいしばつて己を落ちつけようと努めるのである。

乱軍の中に氣を失つた李陵が獸脂を灯し獸糞を焚いた。單于の帳房の中で目を覚ましたとき、咄嗟に彼は心を決めた。自ら首刎ねて辱しめを免れるか、それとも今一応は敵に従つておいてそのうちに機を見て脱走する——敗軍の責を償うに足る手柄を土産として——か、この二つのほかに途はないのだが、李陵は、後者を選ぶことに心を決めたのである。

單于は手ずから李陵の繩を解いた。その後の待遇も鄭重を極めた。且侯單于とて先代の昬犁湖單于の弟だが、骨骸の逞しい巨眼赭髯の中年の偉丈夫である。数代の單于に従つて漢と戦つてはきたが、まだ李陵ほどの手強い敵に遭つたことはないと正直に語り、陵の祖父李広の名を引合いに出して陵の善戦

を讚めた。虎を格殺したり岩に矢を立てたりした飛將軍李広の驍名は今もなお胡地にまで語り伝えられている。陵が厚遇を受けるのは、彼が強き者の子孫でありまた彼自身も強かつたからである。食を頒けるときも強壯者が美味をとり老弱者に余り物を与えるのが匈奴のふうであつた。ここでは、強き者が辱しめられることはけつしてない。降將李陵は一つの穹廬と数十人の侍者とを与えられ賓客の礼をもつて遇せられた。

李陵にとつて奇異な生活が始まつた。家は絨帳穹廬、食物は羶肉、飲物は酪漿と獸乳と乳醋酒。着物は狼や羊や熊の皮を綴り合わせた旃裘。牧畜と狩獵と寇掠と、このほかに彼らの生活はない。一望際涯のない高原にも、しか

し、河や湖や山々による境界があつて、单于直轄地のほかは左賢王右賢王左谷蠡王右谷蠡王以下の諸王侯の領地に分けられており、牧民の移住はおのその境界の中に限られているのである。城郭もなければ田畑もない国。村落はあつても、それが季節に従い水草を逐つて土地を変える。

李陵には土地は与えられない。单于麾下の諸将とともにいつも单于に従っていた。隙があつたら单于の首でも、と李陵は狙つていたが、容易に機会が来ない。たとい、单于を討果たしたとしても、その首を持つて脱出することは、非常な機会に恵まれないかぎり、まず不可能であつた。胡地にあつて单于と刺違えたのでは、匈奴は己の不名誉を有耶無耶のうちに葬つてしまうこと必

定よゆえ、おそらく漢に聞こえることはあるまい。李陵は辛抱しんぼうづ強く、その不可能とも思われる機会の到来を待った。

单于ぜんうの幕下ばつかには、李陵りりようのほかにも漢の降人こうじんが幾人かいた。

その中の一人、衛律えいりつという男は軍人ではなかったが、丁靈王ていれいおう

の位もちを貰もらつて最も重く单于に用いられている。その父は胡人こじんだが、

故ゆえあつて衛律は漢の都で生まれ成長した。武帝に仕えていたのだ

が、先年協律都尉きようりつとい李延年りえんねんの事に坐ざするのを懼おそれて、亡にげて匈き

奴ようどに歸きしたのである。血が血だけに胡風こふうになじむことも速く、

相当の才物でもあり、常に且そてい候单于ぜんうの帷幄いあくに参じてすべての

画策あずに与あずかっていた。李陵はこの衛律を始め、漢人かんじんの降くだつて匈

奴の中にあるものと、ほとんど口をきかなかつた。彼の頭の中に

ある計画について事をともにすべき人物がいなと思われたのである。そういえば、他の漢人同士の間でもまた、互いに妙に気まずいものを感じるらしく、相互に親しく交わることがないようであつた。

一度单于は李陵を呼んで軍略上の示教を乞うたことがある。それは東胡とうこに対しての戦いだつたので、陵は快く己おのが意見を述べた。次に单于が同じような相談を持ちかけたとき、それは漢軍に対する策戦についてであつた。李陵はハッキリと嫌いやな表情をしたまま口を開こうとしなかつた。单于も強しいて返答を求めようとしなかつた。それからだいぶ久しくたつたころ、代・上郡を寇こうりやく掠する軍隊の一将として南行することを求められた。このときは、漢



に対する戦いには出られない旨を言つてキツパリ断わつた。爾後、  
単于は陵にふたたびこうした要求をしなくなつた。待遇は依然と  
して変わらない。他に利用する目的はなく、ただ士を遇するため  
に士を遇しているのだとしか思われない。とにかくこの単于は男  
だと李陵は感じた。

単于の長子・左賢王が妙に李陵に好意を示しはじめた。好意  
というより尊敬といったほうが近い。二十歳を越したばかりの・  
粗野ではあるが勇氣のある真面目な青年である。強き者への讚美  
が、実に純粹で強烈なのだ。初め李陵のところへ来て騎射を教え  
てくれという。騎射といつても騎のほうは陵に劣らぬほど巧い。  
ことに、裸馬を駆る技術に至つては遙かに陵を凌いでいるので、

李陵はただ射しゃだけを教えることにした。左賢王さけんおうは、熱心な弟子となつた。陵の祖父李広りこうの射における入神にゆうしんの技などを語るとき、蕃族ばんぞくの青年は眸ひとみをかがやかせて熱心に聞入るのである。よく二人して狩獵に出かけた。ほんの僅わずかの供廻りともまわを連れただけで二人は縦横に曠野こうやを疾駆しつくしては狐きつや狼おおかみや羚羊かもしかや羊おとりや鷗きじや雉子などを射た。あるときなど夕暮れ近くなつて矢も尽きかけた二人が——二人の馬は供の者を遙はるかに駈抜かけぬいていたので——一群の狼に囲まれたことがある。馬に鞭むちうち全速力で狼群の中を駈け抜けて逃れたが、そのとき、李陵の馬の尻しりに飛びかかった一匹を、後ろに駈けていた青年左賢王が彎刀わんとうをもつて見事みごとに胴斬どうぎりにした。あとで調べると二人の馬は狼どもに噛かみ裂かれて血だらけになつて

いた。そういう一日ののち、夜、天幕てんまくの中で今日の獲物あつものを羹あつものの中にぶちこんでフウフウ吹きながら啜すするとき、李陵は火影ほかげに顔を火照ほてらせた若い蕃王ばんおうの息子に、ふと友情のようなものをさえ感かんじることがあつた。

天漢三年の秋に匈奴きやうどがまたもや雁門がんもんを犯かした。これに酬むくいとて、翌四年、漢は贰師將軍李広りこうりに騎六万歩七万の大軍を授さずけて朔方さくほうを出でしめ、歩卒一万を率りいた強弩都尉路博徳きやうどといろはくとくにこれを援たすけしめた。ひいて因いん將軍公孫敖こうそんごうは騎一万歩三万をもつて雁門を、游擊將軍韓かん説せつは歩三万をもつて五原ごげんを、それぞれ進発する。近来きんざいにない大北伐ほくばつである。单于ぜんうはこの報うけに接するや、

ただちに婦女、老幼、畜群、資財の類をことごとく余吾水（ケルレン河）北方の地に移し、自ら十万の精騎を率いて李広利・路博徳はくとくの軍を水南すいなんの大草原に邀え撃つた。連戦十余日。漢軍はついに退くのやむなきに至つた。李陵りりように師事する若き左賢王さけんおうは、別に一隊を率いて東方に向かい因※將軍いんかうを迎えてさんざんにこれを破つた。漢軍の左翼たる韓説かんせつの軍もまた得るところなくして兵を引いた。北征は完全な失敗である。李陵は例によつて漢との戦いには陣頭に現われず、水北に退いていたが、左賢王の戦績をひそかに氣遣つて己おのれを発見して愕然がくぜんとした。もちろん、全体としては漢軍の成功と匈奴きようどの敗戦とを望んでいたには違いないが、どうやら左賢王だけは何か負けさせたくないと感じてい

たらしい。李陵はこれに気がついて激しく己を責めた。

その左賢王に打破られた公孫敖こうそんごうが都に帰り、士卒を多く失つて功がなかったとの廉かどで牢ろうに繋つながれたとき、妙な弁解をした。敵の捕虜ほりよが、匈奴軍の強いのは、漢から降くだった李將軍りが常々兵を練り軍略を授けてもつて漢軍に備えさせているからだと言つたというのである。だからといって自軍が敗まけたことの弁解にはならなから、もちろん、因いん※將軍しんの罪は許されなかったが、これを聞いた武帝が、李陵に対し激怒したことは言うまでもない。一度許されて家に戻っていた陵の一族はふたたび獄ごくに収められ、今度は、陵の老母から妻・子・弟に至るまでことごとく殺された。軽薄なる世人の常として、当時隴西ろうせい（李陵の家は隴西の出である）の士

大夫ら皆李家を出したことを恥としたと記されている。

この知らせが李陵の耳に入ったのは半年ほど後のこと、辺境から拉致された一漢卒の口からである。それを聞いたとき、李陵は立上がってその男の胸倉をつかみ、荒々しくゆすぶりながら、事の真偽を今一度たしかめた。たしかにまちがいのないことを知ると、彼は歯をくい縛り、思わず力を両手にこめた。男は身をもがいて、苦悶の呻きを洩らした。陵の手が無意識のうちにその男の咽喉を扼していたのである。陵が手を離すと、男はバツタリ地に倒れた。その姿に目もやらず、陵は帳房の外へ飛出した。

めちやくちやに彼は野を歩いた。激しい憤りが頭の中で渦を巻いた。老母や幼児のことを考えると心は灼けるようであったが、

涙は一滴も出ない。あまりに強い怒りは涙を涸渇こかつさせてしまおうであろう。

今度の場合には限らぬ。今まで我が一家はそもそも漢から、どのような扱いを受けてきたか？ 彼は祖父の李広りこうの最期さいごを思った。（陵の父、当戸とうこは、彼が生まれる数か月前に死んだ。陵はいわゆる、遺腹の児である。だから、少年時代までの彼を教育し鍛えあげたのは、有名なこの祖父であった。）名将李広は数次の北征に大功を樹たてながら、君側の姦かん佞ねいに妨げられて何一つ恩賞にあずからなかった。部下の諸将がつきつきに爵位しやくい封侯ほうこうを得て行くのに、廉潔れんけつな將軍だけは封侯はおろか、終始変わらぬ清貧せいひんに甘んじなければならなかった。最後に彼は大將軍衛青えいせいと衝突し

た。さすがに衛青にはこの老将をいたわる気持はあつたのだが、その幕下ぼつかの一軍吏ぐんりが虎とらの威いを借りて李広はるかを辱はずかしめた。憤激した老名将はすぐその場で——陣營みずかの中で自ら首刎はねたのである。祖父の死を聞いて声をあげてないた少年の日の自分を、陵はいまだにハッキリと憶おぼえている。……

陵の叔父（李広の次男）李敢りかんの最後はどうか。彼は父將軍の惨みじめな死について衛青を怨うらみ、自ら大將軍の邸おもむに赴おもむいてこれを辱はずかしめた。大將軍の甥おいにあたる嫫ひようき騎將軍霍去病かくきよへいがそれを憤うらつて、甘泉宮かんせんきゆうの獵おのときに李敢を射殺した。武帝はそれを知りながら、嫫騎將軍をかばわんがために、李敢は鹿しかの角しかに触れて死んだと発表させたのだ。……。



司馬遷しばせんの場合と違つて、李陵のほうは簡単であつた。憤怒ふんぬがす  
 べてであつた。(無理でも、もう少し早くかねての計画——単于ぜんう  
 の首でも持つて胡地こちを脱するという——を實行すればよかつたとい  
 う悔いを除いては、)ただそれをいかにして現わすかが問題で  
 あるにすぎない。彼は先刻の男の言葉「胡地こちにあつて李將軍が兵  
 を教え漢に備えていると聞いて陛下が激怒され云々うんぬん」を思出し  
 た。ようやく思い当たつたのである。もちろん彼自身にはそんな  
 覚えはないが、同じ漢の降將に李緒りしよという者がある。元、塞外都  
 尉とゐとして奚侯城けいこうじやうを守つていた男だが、これが匈奴きようどに降つて  
 から常に胡軍こぐんに軍略を授け兵を練つてゐる。現に半年前の軍にも、  
 単于に従つて、(問題の公孫敖こうそんごうの軍とではないが)漢軍と戦つ

ている。これだと李陵りりようは思った。同じ李將軍りで、李緒りしよとまちがえられたに違いないのである。

その晩、彼は単身、李緒の帳幕ちようばくへと赴おもむいた。一言も言わぬ、一言も言わせぬ。ただの一刺しで李緒は斃たおれた。

翌朝李陵は単于の前に出て事情を打明けた。心配は要いらぬと単于は言う。だが母の大闕たいえん氏が少々うるさいから——というのは、相当の老齡でありながら、単于の母は李緒と醜きようど關係があつたらしい。単于はそれを承知していたのである。匈奴きようどの風習によれば、父が死ぬと、長子たる者が、亡父の妻さいしやう妾めかけのすべてをそのまま引きついで己おのが妻妾とするのだが、さすがに生母だけはこの中にはいらぬ。生みの母に対する尊敬だけは極端に男尊女卑の彼ら

でも有もつているのである——今しばらく北方へ隠れていてもらいたい、ほとぼりがさめたところに迎えを遣やるから、とつけ加えた。

その言葉に従つて、李陵は一時従者どもをつれ、西北の兜とう銜かん山ざん  
がくりんたつばんれい  
 (額林達班嶺)の麓ふもとに身を避けた。

まもなく問題の大たい闕えん氏が病死し、单ぜん于うの庭ていに呼戻されたとき、  
 李陵りりようは人間が変わつたように見えた。というのは、今まで漢に  
 対する軍略にだけは絶対あずかに与あらなかつた彼が、自ら進みんでその相  
 談に乗ろうと言出したからである。单于はこの変化を見て大いに  
 喜んだ。彼は陵を右校王うこうおうに任じ、己おのが娘の一人をめあわせた。  
 娘を妻にという話は以前にもあつたのだが、今まで断わりつづけ  
 てきた。それを今度は躡ちゆうちよ躡ちよなく妻としたのである。ちようど

酒泉張掖の辺を寇掠すべく南に出て行く一軍があり、  
 陵は自ら請うてその軍に従った。しかし、西南へと取った進路が  
 たまたま浚稽山の麓を過つたとき、さすがに陵の心は曇つた。  
 かつてこの地で己おのれに従つて死戦した部下どものことを考え、彼ら  
 の骨が埋められ彼らの血の染み込んだその砂の上を歩きながら、  
 今の己が身の上を思うと、彼はもはや南行して漢兵と闘う勇気を  
 失つた。病と称して彼は独り北方へ馬を返した。

翌、太始元年、且侯单于が死んで、陵と親しかつた左賢  
 王が後を嗣いだ。狐鹿姑单于というのがこれである。

匈奴の右校王たる李陵の心はいまだにハッキリしない。

母妻子を族滅ぞくめつされた怨みうらみは骨髓こつずいに徹しているもの、自ら兵みずかを率いて漢と戦うことができないのは、先ごろの経験で明らかである。ふたたび漢の地を踏むまいとは誓ったが、この匈奴の俗に化して終生安んじていられるかどうかは、新单于への友情をもつてしても、まださすがに自信がない。考えることの嫌きらいな彼は、イライラしてくると、いつも独り駿馬しゅんめを駆つて曠野こうやに飛び出す。秋しゅう天一碧てんいつぺきの下、嘎々かつかつと蹄ひづめの音を響かせて草原となく丘陵となく狂気のように馬を駆けさせる。何十里かぶつとばした後、馬も人もようやく疲れてくると、高原の中の小川を求めてその澗ほとりに下り、馬に飲みずかう。それから己おのれは草の上に仰向けあおむにねころんで快い疲労感にウツトリと見上げる碧落へきらくの潔きよさ、高さ、広さ。ああ

我もと天地間の一粒いちりゆうし子のみ、なんぞまた漢と胡ことあらんやとふとそんな氣のすることもある。一しきり休むとまた馬またに跨またがり、がむしやらに駈かけ出す。終日乗り疲れ黄こううん雲らつきが落く暉んにずるころになつてようやく彼は幕ぼくえい営えいに戻る。疲労だけが彼のただ一つの救いなのである。

司馬遷しばせんが陵りようのために弁じて罪をえたことを伝える者があつた。

李陵は別にありがたいとも氣の毒だとも思わなかつた。司馬遷とは互いに顔は知つているし挨拶あいさつをしたことはあつても、特に交を結んだというほどの間柄ではなかつた。むしろ、厭いやに議論ばかりしてうるさいやつだからいにか感じていなかつたのである。それに現在の李陵は、他人の不幸を実感するには、あまりに自分

一個の苦しみと闘たたかうのに懸命であつた。よけいな世話とまでは感じなかつたにしても、特に濟まないと感じるものがなかつたのは事実である。

初め一概に野卑やひこつ滑稽けいとしか映うつらなかつた胡地こちの風俗が、しかし、その地の實際の風土・氣候等を背景として考えてみるとけつして野卑でも不合理でもないことが、しだいに李陵にのみこめてきた。厚い皮革製の胡服こふくでなければ朔北さくほくの冬は凌しのげないし、肉食でなければ胡地の寒冷に堪たえるだけの精力を貯たくわえることができない。固定した家屋を築かないのも彼らの生活形態から来た必然で、頭から低級と貶けなし去るのは当たらない。漢人のふうをあくま

で保たもとうとするなら、胡地の自然の中での生活は一日といえども  
 続けられないのである。

かつて先代の且そていこう 侯单于ぜんうの言おのつた言葉を李陵りりようは憶おぼえている。

漢の人間が二言めには、己おのが国を礼儀の国といい、匈奴きようどの行な  
 いをもつて禽きんじゆう 獣じゆうに近いと看みな做なすことを難じて、单于は言いつた。

漢人のいう礼儀とは何ぞ？ 醜みにくいことを表面だけ美しく飾り立たて

る虚飾いの謂いではないか。利を好み人を嫉ねたむこと、漢人と胡人こじんとい

ずれかはなはだしき？ 色いろに耽ふけり財むさぼを貪むさぼること、またいずれかは

なはだしき？ 表うわべを剥はぎ去はれば畢ひつきよう 竟ひつきようなんらの違ちがいはないは

ず。ただ漢人はこれをごまかし飾かざることを知り、我々はそれを知

らぬだけだ、と。漢初こつにく以来あいはの骨肉相喰あむ内乱ちんらんや功臣連けいじんの排はい斥せき



擠せいかん陥の跡を例に引いてこう言われたとき、李陵はほとんど返す  
 言葉に窮した。実際、武人ぶじんたる彼は今までにも、煩瑣はんさな礼のため  
 の礼に対して疑問を感じたことが一再ならずあつたからである。  
 たしかに、胡俗こぞくの粗野そやな正直さのほうか、美名の影に隠れた漢人  
 の陰險さより遙はるかに好ましい場合がしばしばあると思つた。諸夏しよか  
 の俗を正しきもの、胡俗こぞくを卑しきものと頭から決めてかかるのは、  
 あまりにも漢人的な偏見ではないかと、しだいに李陵にはそんな  
 気がしてくる。たとえば今まで人間には名のほかに字あざながなければ  
 ならぬものと、ゆえもなく信じ切つていたが、考えてみれば字が  
 絶対に必要だという理由はどこにもないのであつた。

彼の妻はすこぶる大人おとなしい女だつた。いまだに主人の前に出る

とおずおずしてろくに口も利きけない。しかし、彼らの間にできた男の児は、少しも父親を恐れないで、ヨチヨチと李陵の膝ひざに匍はい上あがつて来る。その児の顔に見入りながら、数年前長ちようあん安あんに残してきた——そして結局母や祖母とともに殺されてしまった——子供おもかけの倂おもかけをふと思おもいかべて李陵は我ぶぜんしらず慥然ぶぜんとするのであつた。

陵きようどが匈奴くだに降くだるよりも早く、ちようどその一年前から、漢ちゆうろうしやうの中ちゆうろうしやう郎そぶ將そぶ蘇武こちが胡地こちに引留ほりよめられていた。

元來蘇武は平和の使節として捕虜交換ほりよのために遣つかわされたのである。ところが、その副使某がたまたま匈奴ないふんの内ないふん紛ふんに關係したために、使節団全員とらが囚とらえられることになつてしまった。单于ぜんうは

彼らを殺そうとはしないで、死をもつて脅かしてこれを降らしめ  
 た。ただ蘇武一人は降服を肯んじないばかりか、辱しめを避けよ  
 うと自ら劍を取つて己が胸を貫いた。昏倒した蘇武に対する胡  
 の手当てといふのがすこぶる変わつていた。地を掘つて坎をつ  
 くり、火を入れて、その上に傷者を寝かせその背中を踏んで血を  
 出させた。漢書には誌されている。この荒療治のおかげで、不  
 幸にも蘇武は半日昏絶したのちにまた息を吹返した。且、侯  
 单于はすっかり彼に惚れ込んだ。数旬ののちようやく蘇武の身体  
 が恢復すると、例の近臣衛律をやつてまた熱心に降をすすめ  
 させた。衛律は蘇武が鉄火の罵詈に遭い、すっかり恥をかい手  
 を引いた。その後蘇武が窖の中に幽閉されたとき、旃毛を雪に

和して喰いもつて飢えを凌いだ話や、ついに北海（バイカル湖）のほとり人なき所に徙されて牡羊が乳を出さば帰るを許さんと言われた話は、持節十九年の彼の名とともに、あまりにも有名だから、ここには述べない。とにかく、李陵が悶々の余生を胡地に埋めようとようやく決心せざるを得なくなったころ、蘇武は、すでに久しく北海のほとりで独り羊を牧していたのである。

李陵にとって蘇武は二十年来の友であつた。かつて時を同じうして侍中を勤めていたこともある。片意地でさばけないところはあるにせよ、確かにまれに見る硬骨の士であることは疑いないと陵は思つていた。天漢元年に蘇武が北へ立つてからまもなく、武の老母が病死したときも、陵は陽陵までその葬を送つ

た。蘇武の妻が良人のふたたび帰る見込みなしと知って、去つて他家に嫁かした噂うわさを聞いたのは、陵の北征出發直前のことであつた。そのとき、陵は友のためにその妻の浮薄をいたく憤つた。

しかし、はからずも自分が匈奴きょうどに降くだるようになってからのちは、もはや蘇武に会いたいとは思わなかつた。武が遙はるか北方うつに遷うつされていて顔を合わせずに済むことをむしろ助かつたと感じていた。ことに、己おのれの家族が戮りくせられてふたたび漢に戻る氣持を失つてからは、いつそうこの「漢節を持した牧羊者」との面接を避けなかつた。

狐鹿姑单于ころくこぜんうが父の後あとを嗣ついでから数年後、一時蘇武が生死不明との噂うわさが伝わつた。父单于がついに降服させることのできなかつ

たこの不屈の漢使の存在を思出した狐鹿姑单于是、蘇武の安否を確かめるとともに、もし健在ならば今一度降服を勧告するよう、李陵に頼んだ。陵が武の友人であることを聞いていたのである。

やむを得ず陵は北へ向かった。

姑且こじよすい水を北さかのぼしつきよすいに溯り 居水との合流点からさらに西北に森林

地帯を突切る。まだ所々に雪の残っている川岸を進むこと数日、

ようやく北ほっかい海あおの碧い水が森と野との向こうに見え出したころ、

この地方の住民なる丁ていれいぞく靈族の案内人は李陵の一行を一軒の哀れ

な丸太小舎ごやへと導いた。小舎の住人が珍しい人声に驚かされて、

弓矢を手に表へ出て来た、頭から毛皮を被かぶつた鬚ひげぼうぼうの熊くまの

ような山男の顔の中に、李陵がかつての移いちゆうきゆう中かんそしけ厩おもかげ監蘇子卿の倅

を見出してからも、先方がこの胡服こふくの大官おほきを前の騎都尉きとゐ李少卿りしょうけいと認めるまでにはなおしばらくの時間が必要であつた。蘇武そぶのほうでは陵が匈奴きょうどに事つかえていることも全然聞いていなかったのである。

感動が、陵の内に在あつて今まで武との会見を避けさせていたものを一瞬圧倒し去つた。二人とも初めほとんどものが言えなかつた。

陵の供ともまわ廻りどもの穹廬きゆうろうがいくつか、あたりに組立てられ、無人の境が急に賑にぎやかになつた。用意してきた酒食がさつそく小舎やに運び入れられ、夜は珍しい歡笑の聲が森の鳥獸を驚かせた。滞在は数日に互わたつた。

己おのが胡服を纏まとうに至つた事情を話すことは、さすがに辛つらかつた。しかし、李陵は少しも弁解の調子を交えずに事実だけを語つた。蘇武がさりげなく語るその数年間の生活はまつたく慘さん憐たんたるものであつたらしい。何年か以前に匈奴の於おけんおう※王が獵おをするとなつた。またまここを過ぎ蘇武に同情して、三年間つづけて衣服食糧等を給してくれたが、その於お※王の死後は、凍いてついた大地から野のねず鼠みを掘出して、飢えを凌しのがなければならぬ始末だと言う。彼の生死不明の噂うわさは彼の養つていた畜群ひようとうが、剽ひようとう盗とうどものため一匹残らずさらわれてしまったことの訛かてん伝でんらしい。陵は蘇武の母の死んだことだけは告げたが、妻が子を棄すてて他家へ行つたことはさすがに言えなかつた。



この男は何を目あてに生きているのかと李陵は怪しんだ。いまだに漢に帰れる日を待ち望んでいるのだろうか。蘇武の口うらから察すれば、いまさらそんな期待は少しももっていないようである。それではなんのためにこうした惨憺<sup>さんたん</sup>たる日々をたえ忍んでいるのか？ 单于<sup>ぜんう</sup>に降服を申出れば重く用いられることは請合<sup>うけあ</sup>いだが、それをする蘇武<sup>そぶ</sup>でないことは初めから分り切っている。陵の怪しむのは、なぜ早く自ら生命<sup>みづか</sup>を絶たないのかという意味であった。李陵<sup>りりよう</sup>自身が希望のない生活を自らの手で断ち切りえないのは、いつのまにかこの地に根<sup>おろ</sup>を下して<sup>しま</sup>った数々の恩愛や義理のためであり、またいまさら死んでも格別漢のために義を立てることにもならないからである。蘇武の場合は違う。彼にはこの地

での係けい累るいもない。漢朝に対する忠信という点から考えるなら、  
 いつまでも節せつ旄ぼうを持して曠野こうやに飢えるのと、ただちに節旄を焼  
 いてのち自ら首刎はねるのとの間に、別に差異はなさそうに思われ  
 る。はじめ捕えられたとき、いきなり自分の胸を刺した蘇武に、  
 今となつて急に死を恐れる心が萌きざしたとは考えられない。李陵は、  
 若いころの蘇武の片意地を——滑こつ稽けいなくらい強情な瘦やせ我が慢まんを  
 思出した。单于ぜんうは榮華を餌えに極度の困こん窮きゆうの中から蘇武を釣つろ  
 うと試みる。餌につられるのはもとより、苦難に堪たええずして自  
 ら殺すこともまた、单于に（あるいはそれによつて象徴される運  
 命に）負けることになる。蘇武はそう考えているのではなからう  
 か。運命と意地の張合いをしているような蘇武の姿が、しかし、

李陵には滑稽や笑止しやうしには見えなかった。想像を絶した困苦・欠乏・酷寒・孤独を、（しかもこれから死に至るまでの長い間を）平然と笑殺していかせるものが、意地だとすれば、この意地こそはまことすさま誠に凄じくも壮大なものと言わねばならぬ。昔の多少は大人げなく見えた蘇武の瘦我慢やせがまんが、かかる大我慢にまで成長しているのを見て李陵は驚嘆した。しかもこの男は自分の行ないが漢にまで知られることを予期していない。自分がふたたび漢に迎えられることはもとより、自分がかかる無人の地で困苦と戦いつつあることを漢はおろか匈奴きょうどの单于にさえ伝えてくれる人間の出て来ることをも期待していなかった。誰にもみとられずに独り死んでいくに違いないその最後の日に、自らみずか顧みて最後まで運命を笑殺

しえたことに満足して死んでいこうというのだ。誰一人己おのが事蹟じせきを知つてくれなくともさしつかえないというのである。李陵りりようは、かつて先代单于ぜんうの首を狙ねらいながら、その目的を果たすとも、自分がそれをもつて匈土きようどの地を脱走しえなければ、せつかくの行為が空むなしく、漢にまで聞こえないであろうことを恐れて、ついに決行の機を見出しえなかつた。人に知られざることを憂えぬ蘇武そぶを前にして、彼はひそかに冷汗の出る思いであつた。

最初の感動が過ぎ、二日三日とたつうちに、李陵の中にやはり一種のこだわりができてくるのをどうすることもできなかつた。何を語るにつけても、己おのれの過去と蘇武のそれとの対比がいちいち

ひっかかってくる。蘇武は義人ぎじん、自分は売国奴ばいこくどと、それほどハ  
 ッキリ考えはしないけれども、森と野と水との沈黙によつて多年  
 の間鍛え上げられた蘇武の厳しさきびの前には己の行為に対する唯一  
 の弁明であつた今までのわが苦悩のごときはひとたま溜りもなく圧倒  
 されるのを感じないわけにいかない。それに、気のせいか、日ひに  
 ちが立つにつれ、蘇武の己に対する態度の中に、何か富者が貧者  
 に対するときのような——己の優越を知つたうえで相手に寛大で  
 であろうとする者の態度を感じはじめた。どことハッキリはいえな  
 いが、どうかした拍子ひょうしにひよいとそういうものの感じられるこ  
 とがある。縊縷ぼろをまとうた蘇武の目の中に、ときとして浮かぶか  
 すかな憐愍れんびんの色を、豪奢ごうしゃな貂裘ちようきゆうをまとうた右校王李うこうおうりりよ

陵はなによりも恐れた。

十日ばかり滞在したのち、李陵は旧友に別れて、悄然と南へ去った。食糧衣服の類は充分に森の丸木小舎に残してきた。

李陵は単于からの依頼たる降服勧告についてはとうとう口を切らなかつた。蘇武の答えは問うまでもなく明らかであるものを、何もいまさらそんな勧告によつて蘇武をも自分をも辱めるには当たらないと思つたからである。

南に帰つてからも、蘇武の存在は一日も彼の頭から去らなかつた。離れて考えるとき、蘇武の姿はかえつていつそうきびしく彼の前に聳えているように思われる。

李陵自身、匈奴への降服という己の行為をよしとしてゐるわ

けではないが、自分の故国につくした跡と、それに対して故国の己に酬むくいたところとを考えるなら、いかに無情な批判者といえども、なお、その「やむを得なかつた」ことを認めるだろうとは信じていた。ところが、ここに一人の男があつて、いかに「やむを得ない」と思われる事情を前にしても、断じて、自らにそれは「やむを得ぬのだ」という考えかたを許そうとしないのである。

飢餓も寒苦も孤独の苦しみも、祖国の冷淡も、己の苦節がついに何なんびと人にも知られないだろうというほとんど確定的な事実も、この男にとって、平生の節義を改めなければならぬほどのやむを得ぬ事情ではないのだ。

蘇武の存在は彼にとって、崇高な訓くんかい誡かいでもあり、いらだたし

い悪夢でもあった。ときどき彼は人を遣わして蘇武の安否を問わせ、食品、牛羊、絨氈を贈った。蘇武をみたい気持と避けたい気持とが彼の中で常に闘っていた。

数年後、今一度李陵は北海のほとりの丸木小舎を訪ねた。そのとき途中で雲中の北方を成る衛兵らに会い、彼らの口から、近ごろ漢の辺境では太守以下吏民が皆白服をつけていることを聞いた。人民がことごとく服を白くしているとあれば天子の喪に相違ない。李陵は武帝の崩じたのを知った。北海の漕に到つてこのことを告げたとき、蘇武は南に向かつて号哭した。慟哭数日、ついに血を嘔くに至った。その有様を見ながら、李陵



はしだいに暗く沈んだ気持ちになっていった。彼はもちろん蘇武の慟哭の真摯さを疑うものではない。その純粋な烈しい悲嘆には心を動かされずにはいられない。だが、自分には今一滴の涙も泛んでこないのである。蘇武は、李陵のように一族を戮せられることこそなかったが、それでも彼の兄は天子の行列にさいしてちよつとした交通事故を起こしたために、また、彼の弟はある犯罪者を捕ええなかつたことのために、ともに責を負うて自殺させられている。どう考えても漢の朝から厚遇されていたとは称しがたいのである。それを知つてのうえで、今日の前に蘇武の純粋な痛哭を見ているうちに、以前にはただ蘇武の強烈な意地とのみ見えたものの底に、実は、譬えようもなく清冽な純粋な漢の国土への

愛情（それは義とか節とかいう外から押しつけられたものではなく、抑え<sup>おさ</sup>ようとして抑えられぬ、こんこんと常に湧出<sup>わきで</sup>る最も親身な自然な愛情）が湛<sup>た</sup>えられていることを、李陵ははじめて発見した。

李陵は己<sup>おのれ</sup>と友とを隔てる根本的なものにぶつかっていやでも己<sup>おのれ</sup>自身に対する暗い懷疑に追いやられざるをえないのである。

蘇武<sup>そぶ</sup>の所から南へ帰つて来ると、ちようど、漢からの使者が到着したところであつた。武帝<sup>ぶてい</sup>の死と昭帝<sup>しょうてい</sup>の即位とを報じてかたがた当分の友好関係を——常に一年とは続いたことのない友好関係だつたが——結ぶための平和の使節である。その使いとして

やつて来たのが、はからずも李陵りりようの故人・隴西ろうせいの任立政じんりつせいら三人であつた。

その年の二月武帝が崩じて、僅わずか八歳の太子弗陵ふつりようが位を嗣ぐや、遺詔いじようによつて侍中奉車都尉じちゆうほうしやとい霍光かくこうが大司馬大將軍だいしはとして政を輔まけることになつた。霍光はもと、李陵と親しかつたし、

左將軍となつた上官桀じようかんけつもまた陵の故人であつた。この二人の間に陵を呼返そうとの相談ができ上がったのである。今度の使いにわざわざ陵の昔の友人が選ばれたのはそのためであつた。

單于ぜんうの前で使者の表向きの用が済むと、盛んな酒宴が張られる。いつもは衛律えいりつがそうした場合の接待役を引受けるのだが、今度は李陵の友人が来た場合とて彼も引張り出されて宴につらなつた。

任立政は陵を見たが、匈奴きやうどの大官連の並んでいる前で、漢に帰れとは言えない。席を隔てて李陵を見ては目配せをし、しばしば己おのれの刀環とうかんを撫なでて暗にその意を伝えようとした。陵はそれを見た。先方の伝えんとするところもほぼ察した。しかし、いかなるしぐさをもつて応こたえるべきかを知らない。

公式の宴が終わつた後で、李陵・衛律らばかりが残つて牛酒と博ばくぎ戯ぎをもつて漢使をもてなした。そのとき任立政が陵に向かつて言う。漢ではいまや大赦たいしやれい令れいが降り万民は太平の仁じんせい政せいを樂らくしんでいる。新帝はいまだ幼少のこととて君が故旧たる霍かく子し孟もう・上じやう官かん少しやう叔しゆくが主上たすを輔たすけて天下の事を用いることとなつたと。立政は、衛律えいりつをもつて完全に胡人こじんになり切つたものと見み做な

して——事実それに違いなかつたが——その前では明らさまに陵に説くのを憚はばかつた。ただ霍光かくこうと上官桀じょうかんけつとの名を挙あげて陵の心を惹ひこうとしたのである。陵は黙もくして答えない。しばらく立りつせ政せいを熟視してから、己おのが髪を撫なでた。その髪も椎ついでい結けいとてすでに中国のふうではない。ややあつて衛律が服を更かえるために座を退いた。初めて隔てのない調子で立政が陵の字あざなを呼んだ。少しょうけ卿いよ、多年の苦しみはいかばかりだったか。霍子孟かくしもうと上官じょうかん少しょうしゆく叔しゆくからよろしくとのことであつたと。その二人の安否を問返す陵のよそよそしい言葉におつかぶせるようにして立政がふたたび言った。少卿よ、帰つてくれ。富貴ふうきなどは言うに足りぬではないか。どうか何もいわずに帰つてくれ。蘇武そぶの所から戻つた

ばかりのこととて李陵も友の切なる言葉に心が動かぬではない。しかし、考えてみるまでもなく、それはもはやどうにもならぬことであつた。「帰るのは易い。だが、また辱しめを見るだけのことではないか？」如何？」言葉半ばにして衛律が座に還つてきた。二人は口を噤んだ。

会が散じて別れ去るとき、任立政はさりげなく陵のそばに寄ると、低声で、ついに帰るに意なきやを今一度尋ねた。陵は頭を横にふつた。丈夫ふたたび辱めらるるあたわずと答えた。その言葉がひどく元気のなかつたのは、衛律に聞こえることを惧れたためではない。

後五年、昭帝の始元六年の夏、このまま人に知られず北方に窮<sup>き</sup>  
 死<sup>ゆうし</sup>すると思われた蘇武<sup>そぶ</sup>が偶然にも漢に帰れることになった。漢  
 の天子が上林苑<sup>じょうりんえん</sup>中で得た雁<sup>かり</sup>の足に蘇武の帛書<sup>はくしよ</sup>がついていた  
 うんぬん云々というあの有名な話は、もちろん、蘇武<sup>そぶ</sup>の死を主張する单<sup>ぜ</sup>  
 于<sup>んう</sup>を説破するためのたためである。十九年前蘇武に従<sup>ち</sup>つて胡地<sup>こち</sup>  
 に来た常<sup>じょうけい</sup>惠<sup>い</sup>という者が漢使に遭<sup>あ</sup>つて蘇武の生存を知らせ、こ  
 の嘘<sup>うそ</sup>をもつて武<sup>ぶ</sup>を救<sup>すくい</sup>出すように教えたのであつた。さつそく北<sup>ほ</sup>  
 海<sup>つかい</sup>の上に使いが飛び、蘇武は单于の庭<sup>てい</sup>につれ出された。李陵<sup>りりやう</sup>  
 の心はさすがに動揺した。ふたたび漢に戻れようと戻れまいと蘇  
 武の偉大さに変わりはなく、したがつて陵の心<sup>しもと</sup>の答<sup>と</sup>たるに変わり  
 はないに違いないが、しかし、天はやつぱり見ていたのだという

考えが李陵をいたく打つた。見ていないようである、やつぱり天は見ている。彼は肅然しゆくぜんとして懼れたおそ。今でも、己の過去おのれをけつして非なりとは思わなければ、なおここに蘇武という男があつて、無理ではなかつたはずの己の過去をも恥ずかしく思わせることを堂々とやつてのけ、しかも、その跡が今や天下けんしよに顯彰かうされることになつたという事實は、なんとしても李陵にはこたえた。胸をかきむしられるような女々めめしい己の氣持が羨望せんぼうではないかと、李陵は極度に懼れたおそ。

別れに臨んで李陵は友のために宴を張つた。いいたいことは山ほどあつた。しかし結局それは、胡こに降くだつたときの己おのれの志なへんが那辺なへんにあつたかということ。その志を行なう前に故国の一族りくが戮りくせら



れて、もはや帰るに由なくなつた事情とに尽きる。それを言えば  
 愚痴ぐちになつてしまふ。彼は一言もそれについてはいわなかつた。  
 ただ、宴酣たけなわにして堪えかねて立上がり、舞いかつ歌うた。

ばんりをゆきすぎさばくをわたる

径万里兮度沙幕

きみのためしようとなつてきようどにふるう  
 為君将兮奮匈奴

みちきゆうぜつししじんくだけ

路窮絶兮矢刃摧

ししゆうほろびなすでおつ

士衆滅兮名已隕

ろうほすでにしすおんにむくいんとほつするもまたいづくにかかえらん

老母已死 雖欲報恩 将安帰

歌つているうちに、声が顫ふるえ涙が頬ほおを伝わつた。女々めめしいぞと

みずかしか  
自ら叱りながら、どうしようもなかった。

蘇武は十九年ぶりで祖国に帰って行つた。

司馬遷はその後も孜々として書き続けた。

この世に生きることをやめた彼は書中の人物としてのみ活きていた。現実の生活ではふたたび開かれることのなくなった彼の口が、魯仲連の舌端を借りてはじめて烈々と火を噴くのである。あるいは伍子胥となつて己が眼を抉らしめ、あるいは藺相如となつて秦王を叱し、あるいは太子丹となつて泣いて荊軻を送つた。楚の屈原の憂憤を叙して、そのまさに汨羅に身を投ぜんとして作るところの懷沙之賦を長々と引用したとき、司

馬遷にはその賦がどうしても己自身の作品のごとき気がしてしかたがなかつた。

稿を起こしてから十四年、腐刑の禍に遭つてから八年。都では巫蠱の獄が起こり、戻太子の悲劇が行なわれていたころ、父子相伝のこの著述がだいたい最初の構想どおりの通史がひととおりでき上がった。これに増補改刪推敲を加えているうちにまた数年がたった。史記百三十卷、五十二万六千五百字が完成したのは、すでに武帝の崩御に近いころであつた。

列伝第七十太史公自序の最後の筆を擱いたとき、司馬遷は几に凭つたまま惘然とした。深い溜息が腹の底から出た。目は庭前の槐樹の茂みに向かつてしばらくはいたが、実は何もの

をも見ていなかった。うつろな耳で、それでも彼は庭のどこからか聞こえてくる一匹の蟬せみの声に耳をすましているようにみえた。歎よろこびがあるはずなのに気の抜けた漠然ぼくぜんとした寂しき、不安のほううが先に来た。

完成した著作を官に納め、父の墓前にその報告をするまではそれでもまだ気が張っていたが、それらが終わると急に酷ひどい虚脱ひどの状態が来た。憑ひょうい依いの去った巫者ふしやのように、身も心もぐったりとくずおれ、まだ六十を出たばかりの彼が急に十年も年をとったように耄ふけた。武帝の崩御ほうぎよも昭帝の即位もかつてのさきの太史たいしれ令いしげせん司馬遷ぬげがらの脱殻ぬげがらにとつてはもはやなんの意味ももたないように見えた。

前に述べた任立政じんりつせいらが胡地こちに李陵りりょうを訪ねて、ふたたび都たすに戻つて来たころは、司馬遷はすでにこの世に亡なかつた。

蘇武そぶと別れた後の李陵については、何一つ正確な記録は残され  
ていない。元平げんぺい元年に胡地こちで死んだということのほかは。

すでに早く、彼と親しかつた狐鹿姑单于ころくこせんうは死に、その子壺衍こえんて  
单于いの代となつていたが、その即位にからんで左賢王さけんおう、右

谷蠡王ろくりおうの内紛があり、閼氏えんしや衛律えいりつらと対抗して李陵も心なら  
ずも、その紛争にまきこまれたろうことは想像かたに難くない。

漢書かんじよの匈奴伝きようどでんには、その後、李陵の胡地もうで儲けた子が烏籍うせ  
都尉きといを立てて单于きんとし、呼韓邪单于こかんやせんうに対抗してついに失敗した旨

が記されている。宣帝せんていの五鳳ごほう二年のことだから、李陵が死んでからちようど十八年めにあたる。李陵の子とあるだけで、名前は記されていない。

# 青空文庫情報

底本：「李陵・山月記・弟子・名人伝」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年9月10日改版初版発行

1998（平成10）年5月30日改版52版発行

入力：佐野良二

校正：松永正敏

2001年3月14日公開

2011年2月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。



# 李陵

中島敦

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>